関西学院
KWANSEI GAKUIN

【2017年　日本建築学会賞（業績）受賞】
伝統的キャンパスの発展的整備
ー関西学院・西宮上ケ原キャンパスのトータル・デザイン

学校法人関西学院
株式会社日本設計
2017年4月

2017年日本建築学会賞（業績）受賞

伝統的キャンパスの発展的整備

～ 関西学院･西宮上ケ原キャンパスのトータルデザイン ～

関西学院西宮上ケ原キャンパスは、1929年の創建以来の設計思想を継承しながら、施設・設備の近代化・高度化の中で『スパニッシュ・ミッション・スタイル』という様式を確立、木々の緑等の周辺環境とともにトータルで調和した佇まいを保っている。

これは、学校と設計者の長年に渡る協働の成果であり、この歴史ある美しいキャンパスが私立学校のアイデンテティを体現していることのみならず、良質な文教住宅都市として発展した地元地域の象徴ともなっている。

『発展』と『継承』
～「変わった」けれど「変わらない」～

【1929年】

上ケ原キャンパス開設

【2014年】

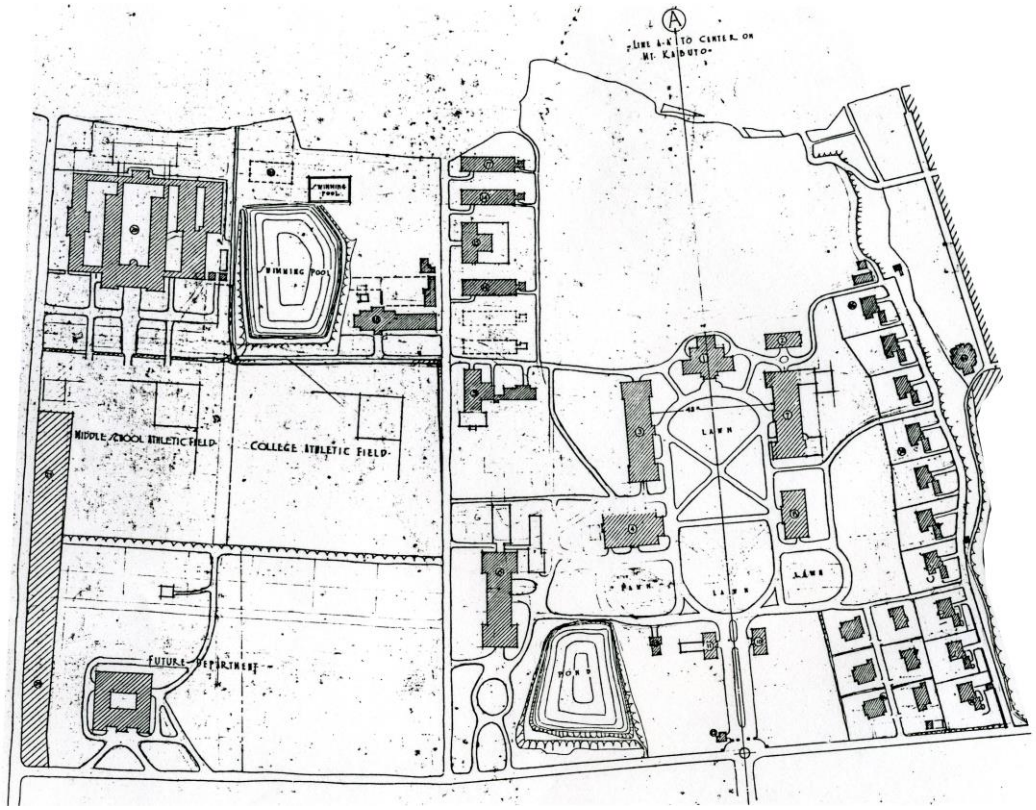
創立125周年

『発展』と『継承』

～ 変わらない佇まいを保ちながら規模拡大、施設・設備の・近代化・高度化を進める ～

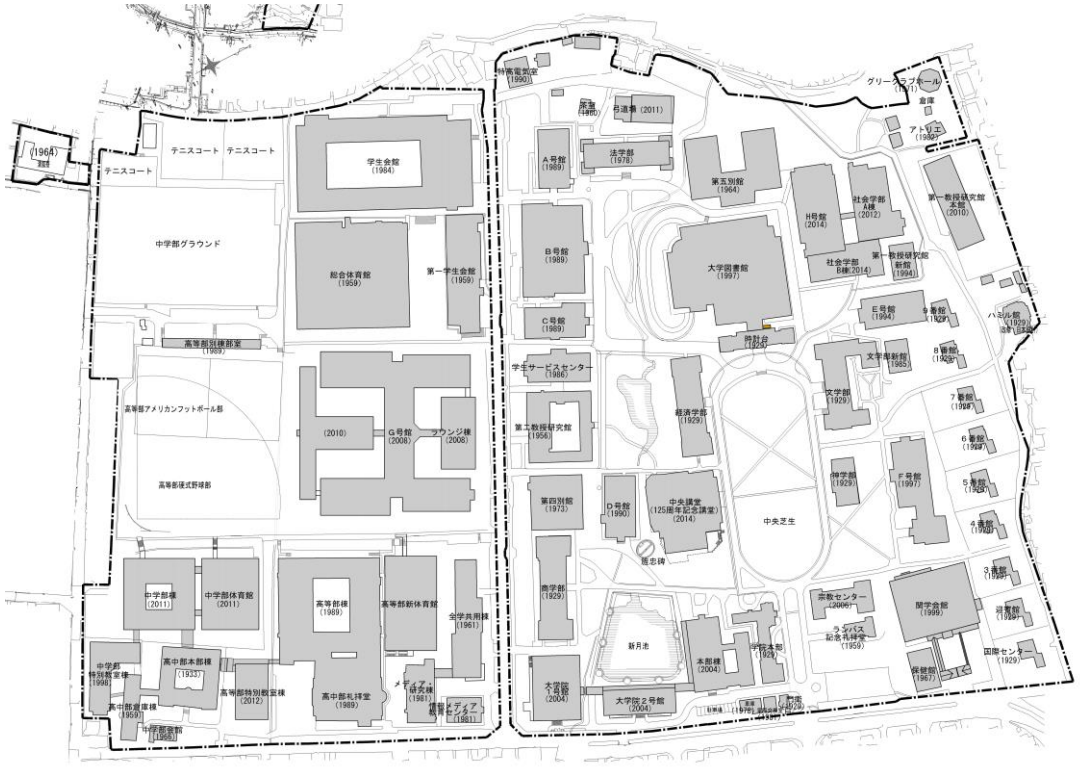
【1929年】

上ケ原キャンパス開設



【2014年】

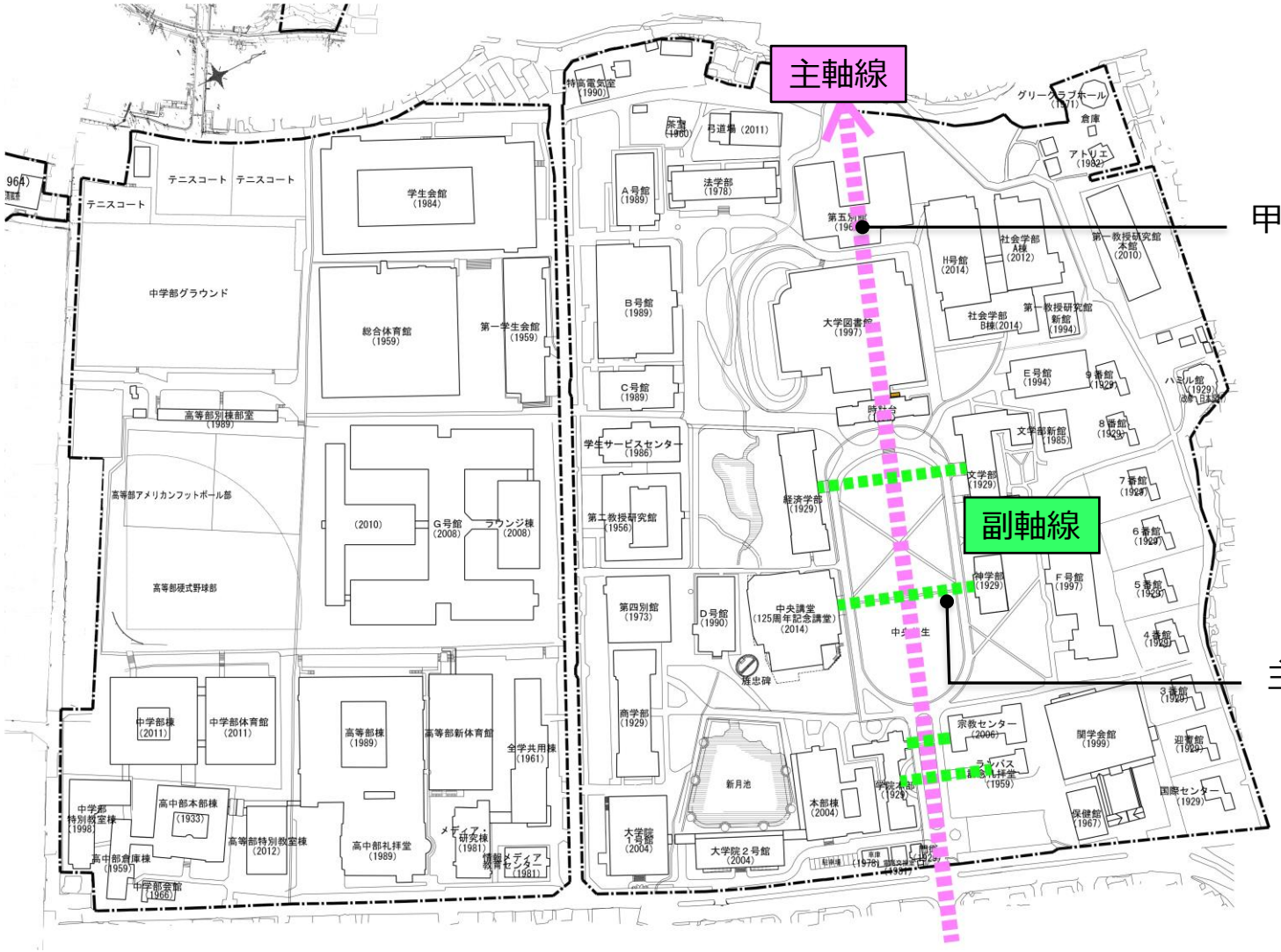
創立125周年



『発展』と『継承』

～ 継承されるキャンパスの「骨格」～

- 正門から中央芝生、時計台、図書館、甲山への主軸。これに直交する４本の副軸。
  この軸線構成が、キャンパスに秩序を与えている。



『発展』と『継承』

～ 継承されるキャンパスの「骨格」～

■ 「ブロック配置のシンメトリー性」と「ファサードヴォリウムの階調」

中央講堂　経済学部　時計台　文学部　神学部

誰もが「美しい」景観と感じる構成要因は、

- 「時計台を中心とする全体配置のシンメトリー」と「個々の建物のシンメトリー」の重層性
- 中央芝生を囲む建物のファサード、ヴォリウムの階調が整っている

この二点にある。

『発展』と『継承』

～ スパニッシュ・ミッション・スタイルの確立 ～

赤いスパニッシュ瓦とスタッコ壁＋シンメトリーなファサードと樹木配置

『発展』と『継承』

～ スパニッシュ・ミッション・スタイルの確立 ～

赤いスパニッシュ瓦とスタッコ壁＋コートヤード（中庭）

『発展』と『継承』

～ スパニッシュ・ミッション・スタイルの確立 ～

赤いスパニッシュ瓦とスタッコ壁＋池を囲むアーチの回廊

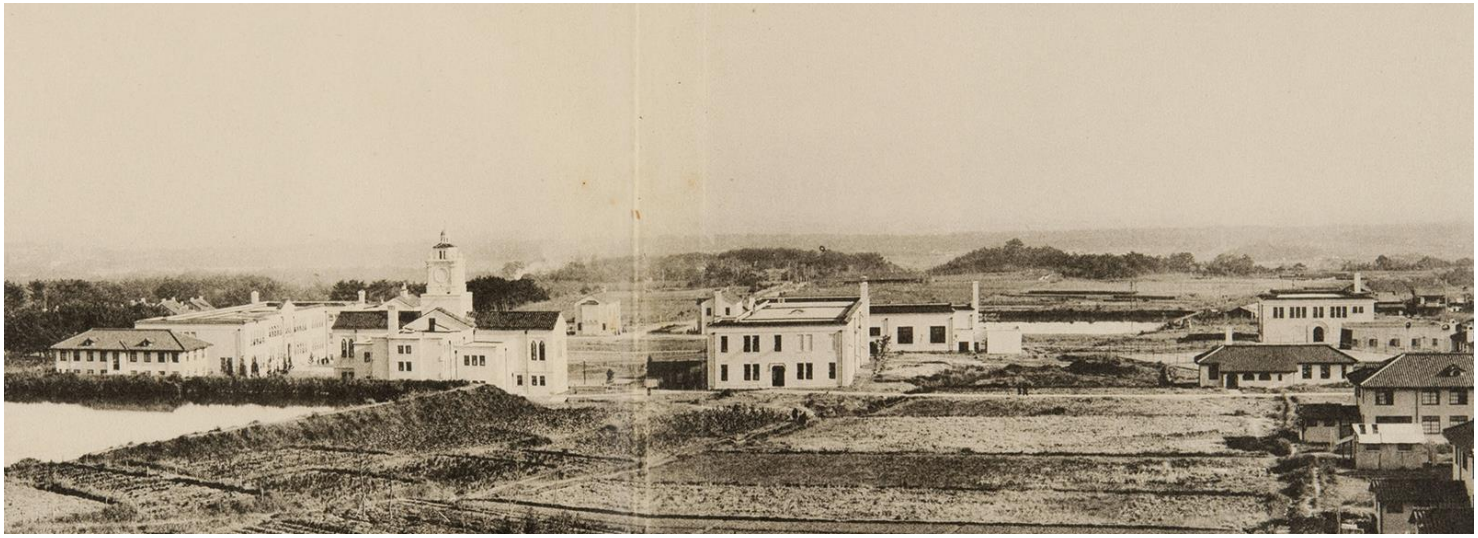
『発展』と『継承』

～ 美しいキャンパスを守る ～

建物・外構・植栽、連綿と続く細心の維持・管理

『発展』と『継承』

～ キャンパスは、建学の精神の象徴として ～



関西学院が1929年、神戸・原田の森から西宮上ケ原に移転したときに、この開放的なキャンパスをC.J.L.ベーツ第４代院長が“We have no fence”と評したという。

それは物理的な意味だけでなく、教職員、学生、学問分野を分かつ垣根もなく、大学と社会、国境という垣根すら意識させない新しい社会を創造する気概を意味していた。創立時からの国際性の涵養や、スクールモットー“Mastery for Service”（奉仕のための練達）に基づいた教育、学部の垣根を越えた学際的教育等が継承されてきている。

『発展』と『継承』
～ “We have no fence” ～

上ケ原キャンパスの設計思想のひとつとして継承されてきた“We have no fence”は、文字通り「垣根なきキャンパスとして」市民にも広く開放され、歴史的建造物に囲まれた散策の道として、地域住民憩いの場として愛されている。

『発展』と『継承』

～「文教住宅都市」西宮市の象徴　⇒　西宮市初の景観地区指定へ　～

上ケ原地区は、1958年に都市計画法が規定する特別用途地域である「文教地区」に指定されている（東京都国立市に次いで日本で二番目（西日本初））。これに次いで、西宮市は、1963年に文教住宅都市宣言を行っている。

また、現在上ケ原キャンパスを含む周辺地区を「景観地区」に指定する方向で調整が進められている。これによって、街並みと調和した景観を維持しながら、関西学院の弾力的な整備計画と、更なる環境の向上が期待される。

伝統的キャンパスの発展的整備
～ 関西学院･西宮上ケ原キャンパスのトータルデザイン ～

はじめに：キャンパス整備の道筋

1　プロジェクトの背景
- 1.1　関西学院の成立ち
- 1.2　1929年開設の西宮上ケ原キャンパス
  ランドスケープ・デザイン“ヴォーリズ空間
- 1.3　スパニッシュ・ミッション・スタイル
- 1.4　“関学の個性”
  スパニッシュ・ミッション・スタイル

2　学院と日本設計、協働のキャンパス整備
- 2.1　協働の経過データ：時系列表記
- 2.2　協働の経過データ：配置図による建物の表記
- 2.3　まず学生施設の整備、次に教育研究施設
- 2.4　スタイルの工夫と配慮
- 2.5　スパニッシュ・ミッション・スタイルで統一
  西宮上ケ原キャンパス
  神戸三田キャンパスと小・中・高校キャンパス

3　中央芝生のオリジナル建築に関わる設計
- 3.1　“ヴォーリズ空間”の修復　新大学図書館
- 3.2　中央講堂の建替え

まとめ：個性を生かして将来へ

伝統的キャンパスの発展的整備

～ 関西学院･西宮上ケ原キャンパスのトータルデザイン ～

はじめに：キャンパス整備の道筋

学研的諸問題を解明していく現代の大学で、先進的であるはずのキャンパスと教育研究施設が、なにゆえ古典的と思える一様式で構成されているのだろう。

・スパニッシュ･ミッション･スタイルの歴史と意味はなにか。
・それを関西学院が現代に用いる必然性はあるのか。
・関西学院にとって、はたして有益なことなのか。
・環境を様式で纏めると、教育研究の発展阻害にならないか。

時代に逆らう様な手法に、素朴な疑問が湧いてくるに違いない。しかしながら、西宮上ケ原キャンパスを訪れて、感動を覚える人は多い。実に単純に、美しい景観や隅々まで整った環境の見事さに驚き、喜びをあらわす。

素朴な疑念と喜びに触れながら、関西学院と株式会社日本設計の40年わたる、まれに見る持続的な協調と協働をもって遂行してきた、キャンパス整備の道筋を辿ってみる。

学校法人 関西学院

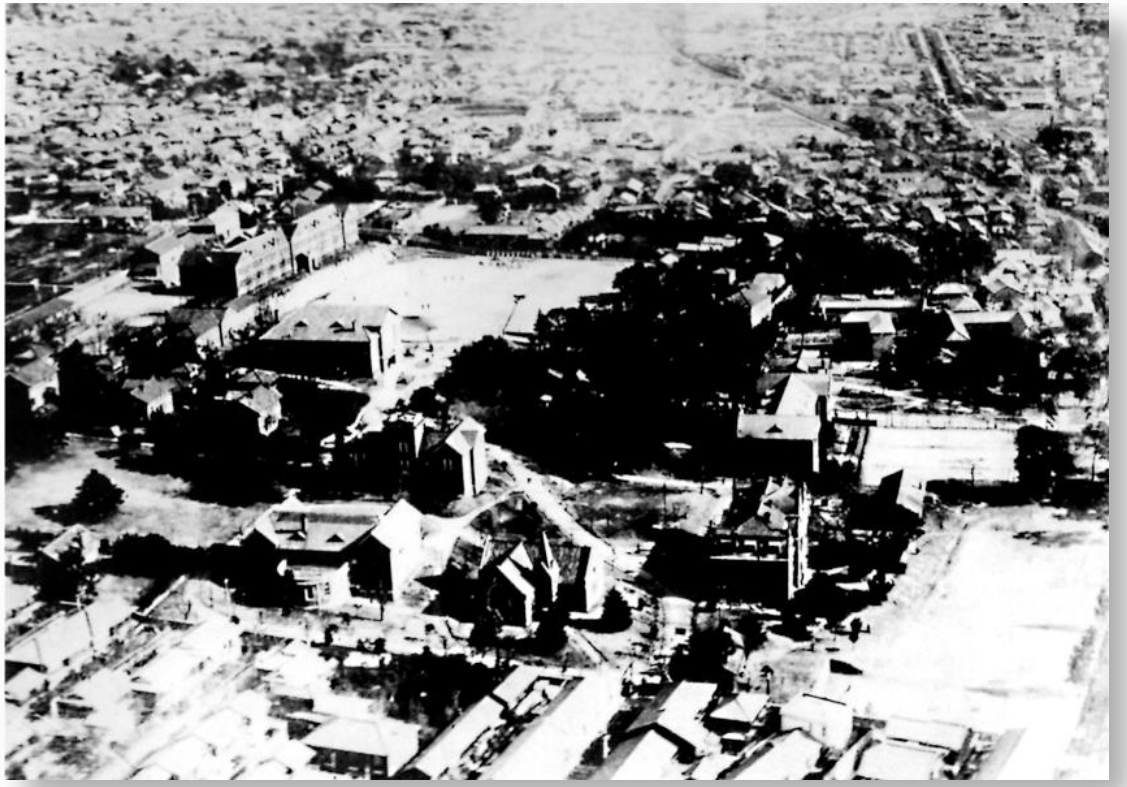
株式会社 日本設計

伝統的キャンパスの発展的整備
～ 関西学院･西宮上ケ原キャンパスのトータルデザイン ～

1 プロジェクトの背景

1.1 関西学院の成立ち

1889(明治22)年に、アメリカ南メソジスト監督教会の宣教師W･R･ランバスが神戸原田に開校。私塾的なキリスト教主義の男子教育でスタートした。21年後にカナダ・メソジスト教会が共同経営に入り、その任に当たった宣教C.J.L.ベーツが、今日の関西学院の骨格を築いていった。後に大学昇格を目指して、西宮上ケ原にキャンパス移転を目論み、建築家ヴォーリズを起用したのは彼であった。



旧原田キャンパス

ブランチ・メモリアル・チャペル（現在の神戸文学館）

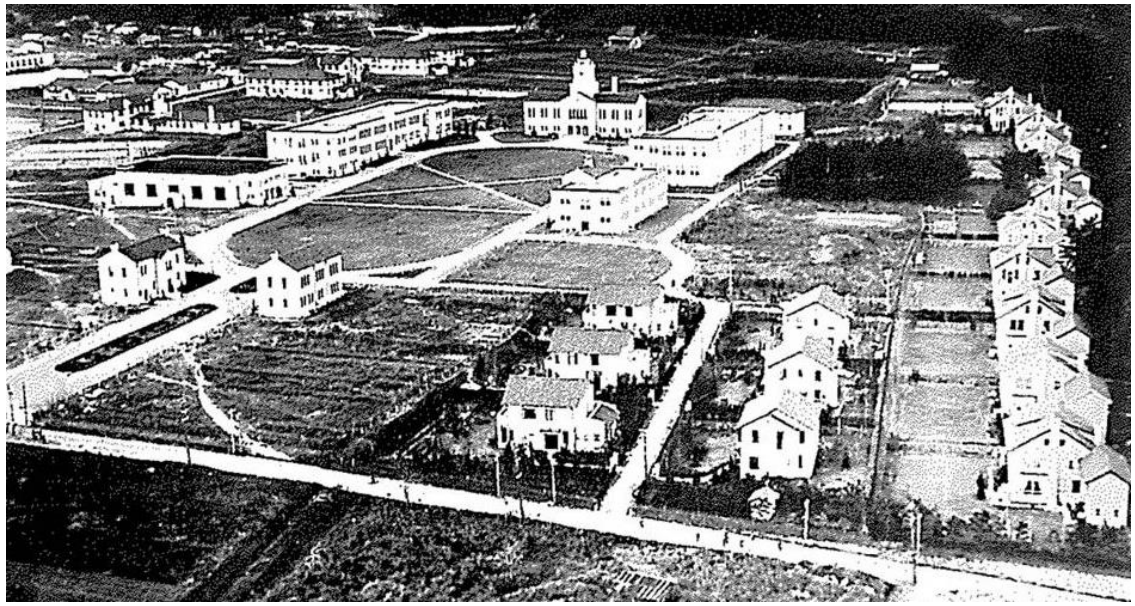
伝統的キャンパスの発展的整備
～ 関西学院･西宮上ケ原キャンパスのトータルデザイン ～

1.2 1929年開設の西宮上ケ原キャンパス
ランドスケープ・デザイン“ヴォーリズ空間”

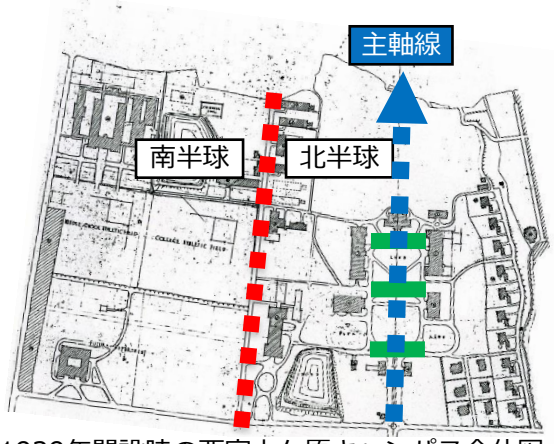
上ケ原は海抜50～70mの台地。ヴォーリズはビューポイント･甲山に向かって一本の主軸線を引き、線上にアクセスの公道を敷設させた。正門から甲山への上り緩斜面に芝生広場を、主軸線上に時計台図書館を置き、直交する副軸線上の左右に校舎を配して、スパニッシュ･ミッション･スタイルで統一。シンメトリーの景観を創り出した。

正門に立つと、視線は時計台を越えて甲山の頂に達し、さらに天空へと上昇する。崇高なものへ導かれていくような、キリスト教精神をバックボーンとする関西学院にふさわしい景観。

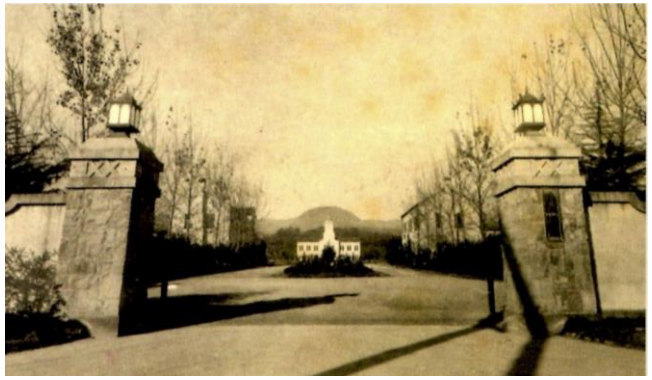
実業を通してキリストの福音を宣べ伝える志を秘めた建築家、ヴォーリズなればこそなし得たランドスケープ・デザインだ。



1929年開設時の西宮上ケ原キャンパス



1929年開設時の西宮上ケ原キャンパス全体図
（23.1ha）軸線構成



甲山に向かう中心軸

伝統的キャンパスの発展的整備
～ 関西学院･西宮上ケ原キャンパスのトータルデザイン ～

1.3 スパニッシュ・ミッション・スタイル

18～19世紀前半に、フランシスコ修道会がカリフォルニアに築いた21か所の伝道基地の、素朴な建築がスタイルの基となり、それに20世紀初頭に流行したスパニッシュ･リバイバルが混合した建築様式。

当地は地震の多発地帯なので、繊細華麗な部位は限定的で、むしろ壁量の多い質朴な表情をもつ。赤瓦屋根、スタッコ壁、正円アーチの構成が基調になっているが、厳密に定型化された様式ではなく、むしろ自在性に特色がある。

カリフォルニア・フランシスカン・ミッション（1978年撮影）

伝統的キャンパスの発展的整備
～ 関西学院･西宮上ケ原キャンパスのトータルデザイン ～

1.4 “関学の個性”
スパニッシュ・ミッション・スタイル

大正末期から昭和初期にかけて、阪神間は大阪商人らの別荘地、郊外住宅地として発展し、欧米文化の浸透と共に生活の洋風化が進み、新しいライフスタイル「**阪神間モダニズム**」を築いていった。

スパニッシュ住宅が流行。ヴォーリズが採用した明るいスパニッシュ･ミッション･スタイルも、この文化潮流に添っていた。しかも、このモダニズムの世界で活躍、エンジョイした学院関係者や卒業生は大勢いたから、キャンパスの強い印象と相乗して、「関学と言えばあのスタイル」というイメージが定着していった。したがって、このスタイルを単なる建築様式ととらえず、「関西学院の個性の表象」としてキャンパス整備を進めることに違和感はなく、学院も積極的であった。

昭和初期のスパニッシュ住宅

阪神間遠景

伝統的キャンパスの発展的整備
～ 関西学院･西宮上ケ原キャンパスのトータルデザイン ～

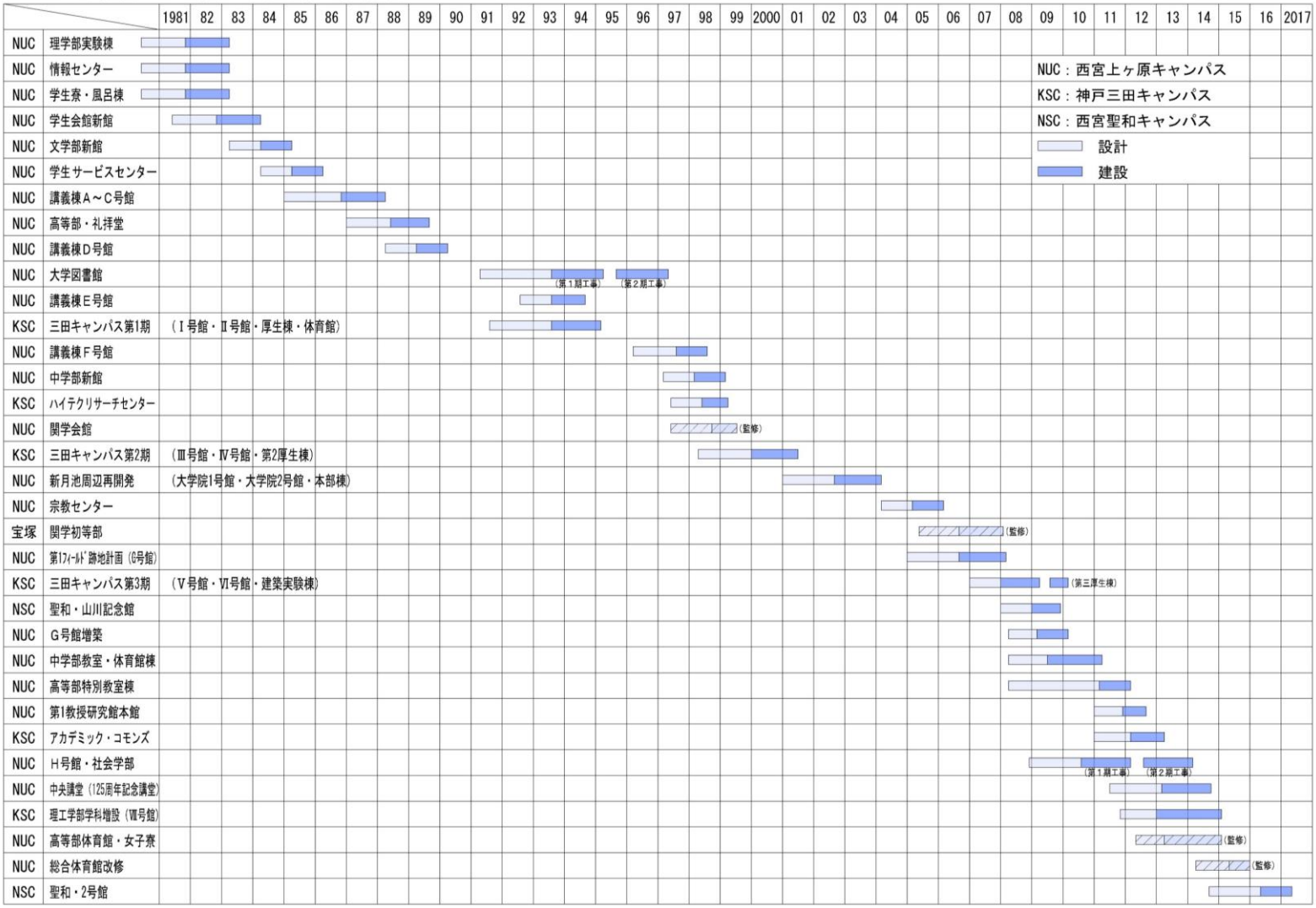
2 学院と日本設計、協働のキャンパス整備

2.1 協働の経過データ：時系列表記

関西学院施設部（現総務・施設管理部）と日本設計関西支社の具体的な設計監理業務に関わる協働を時系列に表記したデータである。

1977年からコンサルティング業務を始めているから、およそ40年の経過となる。

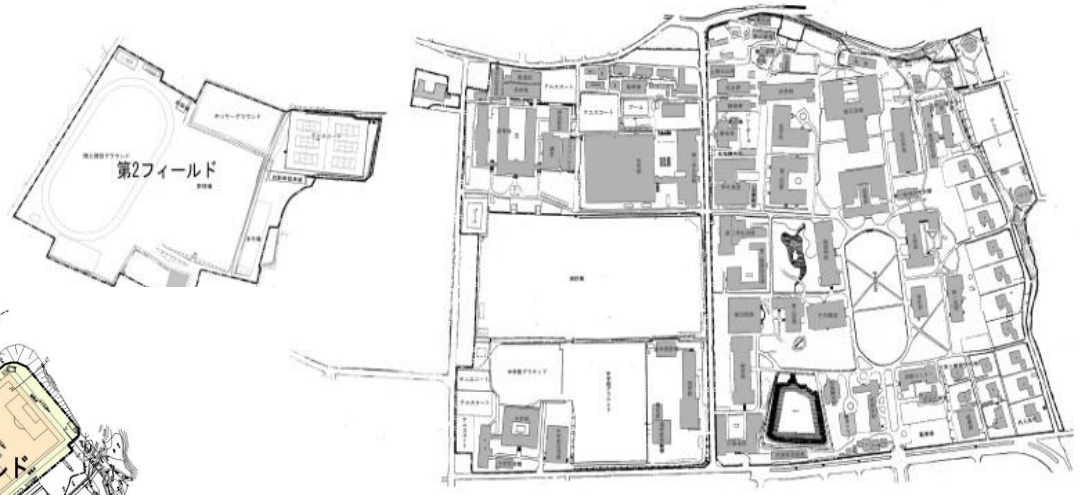
日本設計による関西学院業務の実績表



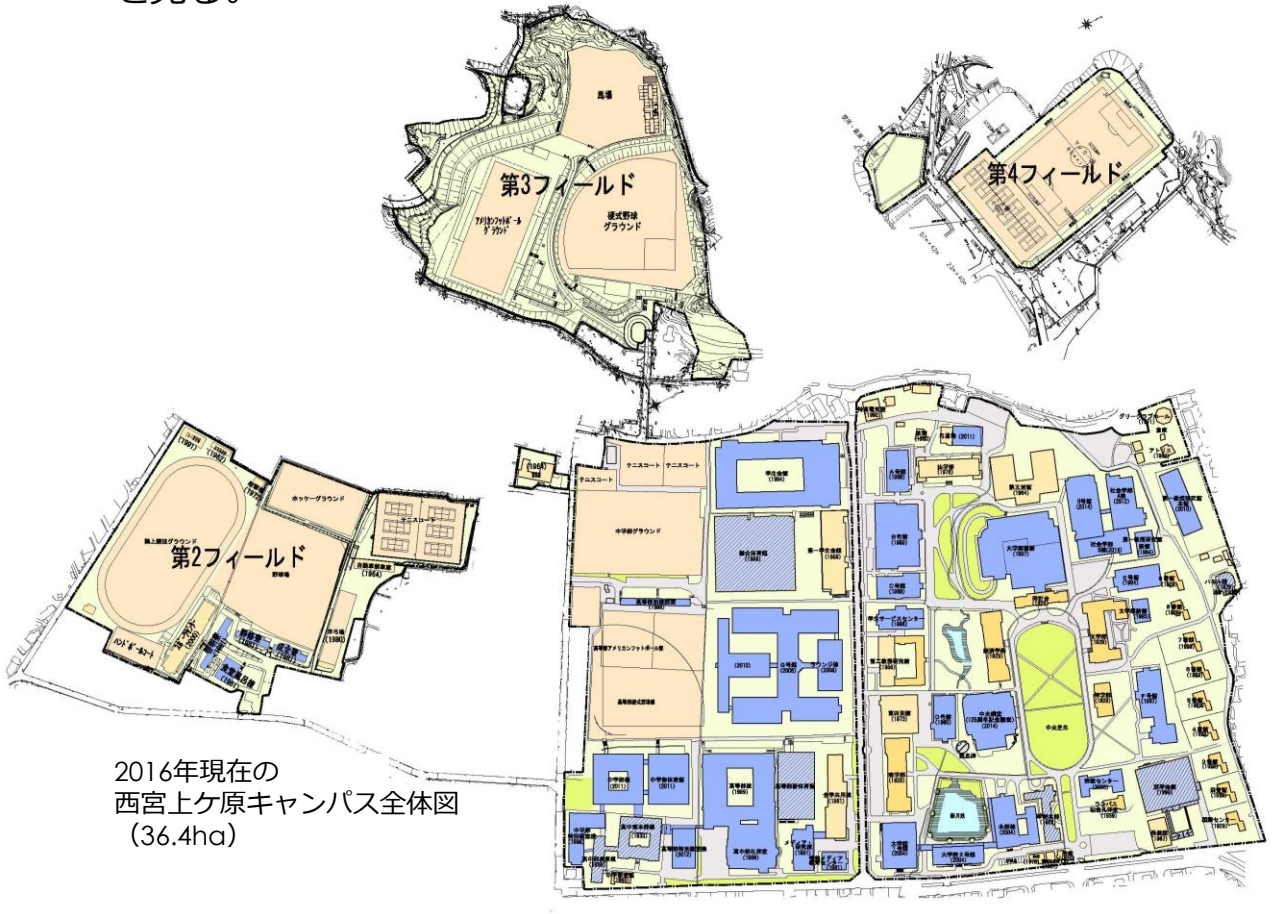
伝統的キャンパスの発展的整備
～ 関西学院･西宮上ケ原キャンパスのトータルデザイン ～

2.2 協働の経過データ：配置図による建物の表記

日本設計がキャンパス整備に参画した1977年当時の全体配置図と、2016年現在の西宮キャンパス上ケ原キャンパスの配置図を並べて、約40年の変遷を見る。



日本設計が参画した1977年の西宮上ケ原キャンパス全体図（28.5ha）



2016年現在の
西宮上ケ原キャンパス全体図
（36.4ha）

日本設計（29棟）

ヴォーリズ・他社設計
日本設計監修（7棟・改修を含む）

ヴォーリズ設計（16棟）

他社設計（12棟）

伝統的キャンパスの発展的整備
～ 関西学院･西宮上ケ原キャンパスのトータルデザイン ～

2.3 まず学生施設の整備、次に教育研究施設

日本設計が参画した1977年頃、学院は創立100周年に向けて、大学発展に伴う整備を進めようとしていた。計画の柱は、学生の福利厚生に関わる「学生施設･整備充実計画」と大学の根幹をなす「教育研究施設･整備充実計画」。

まず学生寮群を近隣の校地に移し、多数の部活サークル小屋は、一大新学生会館を建設して収容。部活グラウンドも近接地に移設。かくして学生施設を先行整備した結果、キャンパス全体で教育研究施設計画の自由度は上がった。

建築デザイン計画の基本は「第一義に施設の機能性を高め」「ヴォーリズ空間との連続性とデザイン秩序を保つ」こと。その両立を図って、ムダ地の少ないコートヤードやポケットヤードを造成し、放置されていた調整池を改修して、教育研究施設の建設に備えた。

伝統的キャンパスの発展的整備
～ 関西学院･西宮上ケ原キャンパスのトータルデザイン ～

2.4 スタイルの工夫と配慮

スパニッシュ･ミッション･スタイルの使用に当たっては、ヴォーリズのデザイン技法の援用を基本にして、さらに、昨今の建築耐震性の強化にかんがみ、原型フランシスカン･ミッションに立ち戻って、壁量を多く厚くし、堅固で質実な感じを強めた。こうして、関西学院独特のスタイルを確立した。

外壁は、建物が大きくなると、旧来のスタッコ風仕上げでは平板すぎるので、凹凸を深く付ける鏝による塗り方を考案したところ、スタイルにふさわしい手作り感が出せるようになった。

凹凸の大きいスタッコ鏝仕上げ

伝統的キャンパスの発展的整備
～ 関西学院･西宮上ケ原キャンパスのトータルデザイン ～

2.5 スパニッシュ・ミッション・スタイルで統一 西宮上ケ原キャンパス

“ヴォーリズ空間”に倣いながらも、一回り大きい建物群が囲む、コートヤードの環境整備を進めた。そして、庭園化した新月池に法科大学院（大学院２号館）や本部棟の映る、広々した水辺の風景がキャンパスに加わった。グランド跡に人間福祉学部や国際学部が入るＧ号館を建設。また社会学部は、戦後に建った無表情な箱型校舎を取り壊して、「学習･憩い･学生活動」の融合した新しいタイプの学生施設、ラーニングコモンズを内包したＨ号館を併設し、風情あるトータル･デザインに整えた。

新月池：調整池の庭園化、法科大学院

旧社会学部

新社会学部＋コモンズ

人間福祉学部・国際学部

伝統的キャンパスの発展的整備
～ 関西学院･西宮上ケ原キャンパスのトータルデザイン ～

神戸三田キャンパスと小・中・高校キャンパス

神戸三田キャンパスは、天空の眩い丘陵開発地35haに、キャンパスのバックボーンとなる緩いカーブの軸線を引き、並木道にして、総合政策部、理工学部などの建物群をクラスター状に配置。スパニッシュ･ミッション･スタイルで整った景観は「全学一体の理念」をきわめて自然に現わしている。

加えて、宝塚市に開校した**初等部**も、中高一貫の教育の強化を図って隣接整備した上ケ原キャンパス内の**中学部･高等部**も、赤瓦屋根と白亜のスタッコ壁が輝いて、“オール関西学院”を表現している。

神戸三田キャンパス

初等部

高中礼拝堂

高等部

伝統的キャンパスの発展的整備

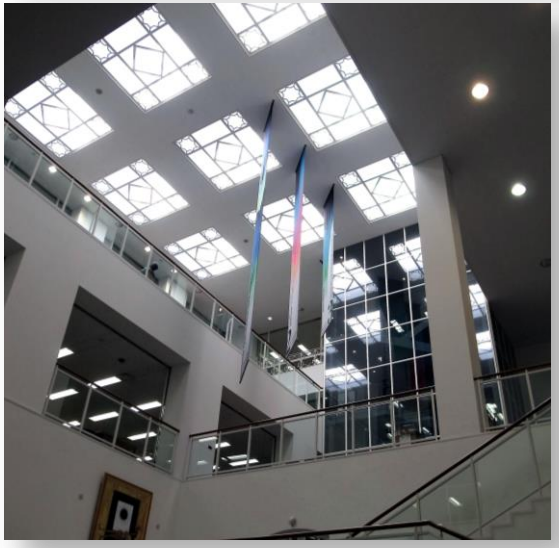
～ 関西学院･西宮上ケ原キャンパスのトータルデザイン ～

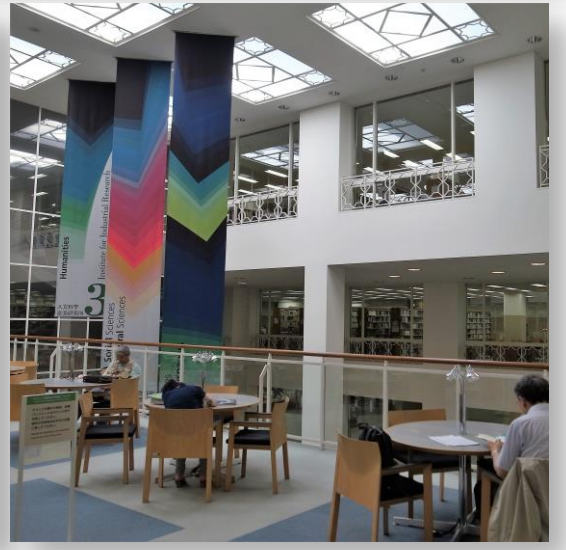
3 中央芝生のオリジナル建築に関わる設計

3.1 “ヴォーリズ空間”の修復　新大学図書館

長年、時計台のシンメトリー景観は壊れていた。ようやく150万冊規模の図書館を建てる運びとなったが、今度は裏山で建設中の高台住宅の屋根が見え始めたので、建物の頭を高度制限の15mに設定して、必要容積を下方へ納めてゆき、地下階になる閲覧室はサンクンガーデンで外部に開いた。背後はスパニッシュ瓦屋根にして、時計台がくっきり浮かぶ元のシンメトリー景観に修復した。現在、時計台の旧図書館は、大学博物館として活用している。

壊れたシンメトリー景観





第15回日本図書館協会建築賞受賞

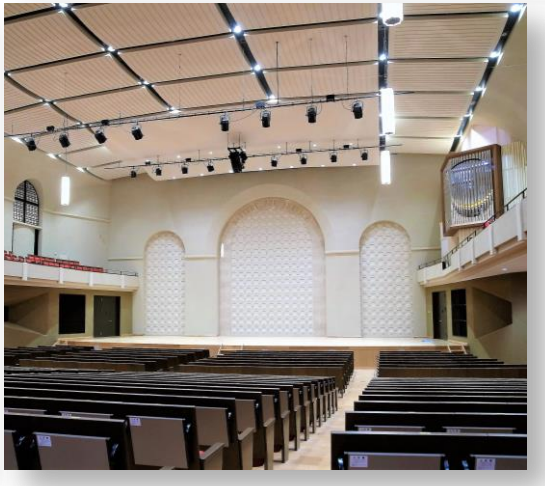
伝統的キャンパスの発展的整備
～ 関西学院･西宮上ケ原キャンパスのトータルデザイン ～

3.2 講堂の建替え⇒創立125周年記念講堂へ

芝生広場を横切る副軸線上で、中央講堂は神学部と対峙する配置だから、同じ位置に建てねばならない。

しかし、そこに1200席のヴォリウムの新しい講堂をまともに建てると、時計台を中心にしたシンメトリー景観は左側が重くなってバランスを崩してしまう。そこで、実測に基づいて再現する旧講堂ファサードのパラペットから15mの高さまで、片流れ大屋根を掛けて、視界と天空の広がりを保つようにした。このように断面計画から着手して、新講堂機能の充実と”ヴォーリズ空間” の維持を両立させた。

旧中央講堂



伝統的キャンパスの発展的整備
～ 関西学院･西宮上ケ原キャンパスのトータルデザイン ～

まとめ：個性を生かして将来へ

数ある大学で、ここまでトータル･デザインされたキャンパスを持つ学園は、恐らく本学だけではないだろうか。

先人の遺した優れた環境を、現代の教育環境として整備を重ね、将来も継続するキャンパス。何にも代えがたい資産、大きな経営資源だ。学生には青春の知の資産、卒業生には懐かしい心の資産。彼らの思いの集積が、資産の価値を更に高めていく。

関西学院の存在は、キャンパス周辺の路線価格に好影響を与えるほどに、町を巻き込んで美化していく。文教住宅都市西宮の生活環境に資するところは大きいはずである。

近隣の町並み

関西学院のベーツ第４代院長はヴォーリズのキャンパスを見て評した。

「We have no fence」

私たちはこれを受け継いできた。

キャンパスの開放感、垣根のない教育、研究、運営、

そして、こころの広がりを。